

第72回 国際理解・国際協力・多文化共生のための高校生の主張コンクール東京都大会 金賞

東京都立国際高等学校 3年

穴戸 柚奈

課題②

あなたが国連の総会議場で自由にスピーチすることができるとしたら、何を訴えるか。

副題

私とあなたの「同じ」を探して

「違いを受け入れよう」この言葉を初めて聞いたとき、私は「確かに大切なことだ」と思いました。世界にはたくさんの文化や価値観があり、それぞれ異なる考え方や習慣を持っています。そういった多様性を尊重し合うことは、国際社会で共に生きていくうえで欠かせない。そう考えていました。

しかしある日、ふと疑問がわきました。

「違いにばかり注目して良いのだろうか？」

中学の授業で、ある国ではネズミを食べる習慣があると学んだとき、クラスメイトの一人が「そんなの信じられない、気持ち悪い」と言いました。でも先生はすぐに、「慣れ親しんだ食べ物は国によって違うだけだよ」と説明しました。その瞬間、私ははっと気づきました。どんな文化にも「当たり前」はあり、それは他の誰かにとっての「驚き」でもある。そして、その根本には、共通する人間らしさがあるのではないかと。

例えば、その国の人がネズミを食べるのは私たちがラーメンを美味しいと思って食べるのと本質的には変わりません。「美味しいから食べる」「お腹が空いたから食べる」という行動の根本は、みんな同じなのです。文化的な表れ方は違っても、その背景にある感情や欲求は共通しているのです。これは、私にとって「違い」よりも「共通点」に注目する大切さを教えてくれた出来事でした。

実際、「違いを受け入れる」という言葉で無意識に「違い」にばかり目を向けてしまっているのかもしれませんが。本当に大切なのは、文化や言語、宗教といった外側の違いに惑わされず、その奥にある「共通の感情や価値観」を見つけ出すことだと私は思います。

今も世界では、ウクライナとロシアの戦争、シリアやスーダン、パキスタンの政情不安など、数えきれな

いほどの紛争が続いています。ニュースの中で語られるのは、対立する宗教や政治体制、文化的背景の「違い」ばかりです。しかしその裏には、家族を失った悲しみや、住む場所を奪われた不安と恐怖という、人間としてごく自然な感情があります。たとえ私たちが遠く離れた場所にいても、その痛みは想像できます。なぜなら「悲しい」「怖い」「誰かを守りたい」と願う気持ちは、どんな国や文化に生きる人にも共通するからです。そうした感情を理解することが、真の相互理解と平和の第一歩なのではないでしょうか。

私は実際に、文化や価値観が大きく異なる人たちと接する中で、小さな共通点が心の距離を縮めるのを何度も感じてきました。例えば、好きな音楽やアイドルの話で盛り上がったり、「私もそれ苦手なんだよね」と共感したりすると、たった一言で関係が深まるのです。

だからこそ、もし私が国連の場で自由に発言できるとしたら、こう訴えたいです。

国連は多様性を尊重する場であることに間違いはありません。しかしそれと同時に、世界中の人々が「共通点を見出す努力」をすることも必要だと思います。自分とは異なる存在を認めることは大切ですが、「自分たちは似ている」という視点から出発すれば、偏見や差別、そして争いを減らす道が見えてくるはずです。

共通点を見つけること、それが平和への第一歩だと思うのです。

私はここにいる全ての人に問いかけたい。「私たちを隔てるものではなく、繋ぐものを探しませんか？」

笑い、泣き、誰かを思いやる気持ち。それらは国境を越えて私たち全員に共通するものです。違いを認め合うだけでなく、その奥にある同じ感情に目を向けること。それこそが世界を繋ぎ、未来を照らす最も強い力だと信じています。